の家には、蛤の貝殼に飲食を盛て供するも又多し云々とあり、按に、五節供遊びに、昔椀に准へ、こに貧賤の家にはといへるをもつて、寶暦のはじめより、此事のはやく廢たるをおもふべし、又、長水が著し、不思議物語（寶暦十年）の序に、雀海中に入て蛤となる、それによりて此物語、うそと實の行違ひ、うそばつかりとおもうても、蛤化して雛の椀、これは實の雛遊び云々、此文は美を盡したる器にて備るより、蛤具の椀を用ふるこそ、實の雛遊びなれといふにやあらん、又、黛山が評したる前句附に、雀又椀と化したる雛節供、といふ句あり、是は又といふ字に、月令の古事を聞せ、蛤といふことを略たる利口なり、此帖に辰の八月とあり、寶暦十年なるべし、今かならず、雛あそびに蛤を備ふるは、この餘波にやあらん、又云、内田順也が俳諧五節句（元祿元年印本、尚齋藏書）、三月の條に、桃の繪櫃（同柳）木地の櫃に桃柳を畫、内に草の餅赤飯もいるゝ、御臺匙といふ物添、是には繪なし、おつぼ、是五器なり、木地の挽物に繪ありと記したれば、ふるく雛の五器（ワン）のなきにはあらず、こゝにいふ木地の挽物の漆器となり、緑青繪なんど畫たるが、蒔繪の美を盡すやうになりたるは、寶暦の都老子に近年といへば、享保元文の比に起る歟、高貴の人は別のことなれば、美麗なるもふるくよりありしなるべし、

俳諧坂東太郎（延寶七年印本、才麻呂撰）、手道具や蒔繪の林雛の桃　調泉

是さきにいふ如く、高貴の人の雛遊びをいふ歟、又常の手具足に蒔繪あるを、雛のとき取出して飾りしにて、雛の具にはあらざる歟、

〔骨董集（上編下前）〕雛繪櫃　寛永より元祿のあひだの繪どもを參考するに、當時の雛遊はいたく質素なりき、たゞ座上に敷物してすゑ置のみにて、壇をまうくることなし、雍州府志（貞享三刻卷七）倭俗以紙作小偶人夫婦之形、是謂雛壹對、其外大人小兒之形各造之、女子並置坐上云々といへり、これらにても知るべし、たゞし其角が五元集に、段のひな清水坂を一目かな、といへる發句もあれば、たま〳〵段をまうけたるもありし歟、享保にいたりて一段をまうけたる圖あり、下にあらはす